

## 繻かれる襞 ～書物の持つ官能性について

### Perused folds –The sensuality of books

田川とも子\*

TAGAWA Tomoko\*

#### 1. 繁殖する無生物

「役にたたないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない。」とはモダン・デザインの巨匠ウィリアム・モリスの教えである。長年地下室にひとり住んでいるとどうしてもモノが無制限に堆積していきがちだが、この言葉を常に念頭に置くことでかなり回避してきた。しかし、どうしても増殖し続ける悪魔のような物塊がある。残念ながら私の地下室はもうそれらに完全に制圧され巣喰われてしまっている。…奴らの名前は書物だ。私はビブリアマニアではない。そしてきちんと冒頭の基準はクリアしている。つまり私の書斎を埋め尽くす数千冊の書物はすべて私にとって「役にたつもの」か「美しいと思うもの」の少なくともどちらかにあてはまってしまっていて、手放せない。書物のもつ物質的な重さは、私の蒙昧な精神と不安定な生活をきちんとこの世界に係留する重しである。

フリーの教職という生業が必要とする知識の供給源でもあり、人生という業を乗り切るための活力源でもあり、という「役に立つ」側面。そして紙の質感、文字の書体、表紙の意匠、葉の手触り、版のレイアウト、タイトルの響き、インクの匂い…、そうした「美しい」形式は、ときに意味内容以上に私には重要であり、そそる。昨今では手軽で安価な文庫や新書が主流になってきたが、中身に合わせていてねいに拵（こしら）えられたハードカバーの書物は総合芸術と呼んでも過言ではない。

#### 2. 本のさわり

本とは、本当は何か。その本分はどこにあり、本性はどんなものか。すでにその本質を明らかにしてくれているさまざまな見本・手本となる書は存在するが、今一度まとめてみたい。

「本」という文字は「木」の“根本”に垂直に一本交差した形態である。根の部分の印。その逆は末で、まさに本末転倒するわけだ。本能のように根にあるもの、本職のように中心に据えられたもの、本物として正しいもの、標本として参照されるべきもの、資本のようにそこから広がるもの…。日の本にある国名、日本。そして、取り返しがつかないゆえに真剣さを要求される、本気の本番。あるいは自分の外部の大いなる他者に垂直に斬り込んでいこうとする標識。

漢和辞典や『本と人の歴史事典』をひもとけば、本という文字は“木の根元に傷をつけて記したもの”とある。人間が木の根に意図的に記号を刻んで何らかの記録としたことから書物の歴史ははじまったということであり、また、初期の本は木を切る事で成立したことも事

---

\* 神戸女学院大学非常勤講師

\* Kobe College, part-time lecturer

実である。板の表紙、紙の原料も木由来だ。そして、樹木の内皮に印を刻んだものが本の原型である、とも記されている。英語の book の語源は beech、つまりブナの木であり（ドイツ語の Buch の語源も Buche で同様）、イタリア語系統の libro は樹の皮に由来する。

この時点で現在蔓延しようとしている電子ブックは本来の「本」とは言えない。そこには悲しいほど木の匂いも根元の傷も存在しないからだ。理知性で世界を編集しようとした近現代という時代は、とにかく分類に力を注いだ時代である。分ければ分かる、をモットーにどんどん闇を切り裂き光をあてることに没頭してきた。近代合理主義の発揮した「本」領のその「末」端で、名と実は分け隔てられ、乖離してしまったということか。電子的に全面的に光輝くディスプレイの、滑らかにして木目のない表面を撫でる軽やかな受容作法は、不透明な物質性と重さの体感をもって頁をめくられてきた読書体験に代わりえるのだろうか。

### 3. 肥沃な三日月地帯の本

歴史を遡ってみよう。

本の本意を「綴じられた冊子体」だの「49 頁以上からなる非定期刊行物」（ユネスコの定義）からさらにさかのぼり、文字や文様の記録や文化の伝承手段とするならば、原点は文字の発明とともにあるだろう。先史時代に対して、文書記録が存在しうる時代からを有史時代というが、シュメールやエジプトで文字が成立したあたりまで本の歴史は遡及しうる。

川の間という意味をもつメソポタミアで楔形文字が成立したことは周知のとおりである。数千年前、シュメールの人々は粘土版に葦の茎を押し付けて文字を刻んだ。豊かな資源を誇った高度な文明では当然ひとびとの所産がその生身の即物的な統制範囲を超えてしまう。記憶を補うために記録が必要となる。おそらく最初は収穫した農作物の分配や、多産に繁殖する家畜動物などの帳簿といった必要不可欠なものにはじまり、やがて法典などの規範のコンセンサスに用いられ、さらには叙事詩など芸術文化的な方面へと広がったことは予測に難くない。メソポタミアにはすでに個人が ID として円筒印章を所持する習慣があったそうだが、模様が彫られた印章に染料をつけて転がす事で転写する様式は、輪転印刷の先取りであるという指摘も有効である。古代のメソポタミア人がその文化を刻んだ粘土板という支持体は、そのしなやかさゆえに潰して再利用が効き、また保存が必要なものについては焼けば硬化するという実にエコでクリーンな優れた道具であった。粘土板の数が増えるとじきにその一覧リストのようなものが必要になる。シュメールはその際すでにインキピットを使用していた。incipit は「ここにはじまる」という意味のラテン語だが、文書の冒頭のいくつかのワードを指す。書物に標題を別途付与するという習慣がまだない時代のタイトルだ。（こんにち一般的な本の題名は、書物が大量に刊行されるようになった時代からの分類工夫である。）インキピットで始まる文書はエクспリキット（explicit、「ここに終わる」の意）で完結される。ちなみに今私はこの文書をワード形式で PC のデスクトップに保存しているが、その際「別名で保存」を指定しない限りは冒頭の数語が自動的に見出しとなっている。皮肉にも時代の末端最先端のインキピットといえる。

風土と密接して道具は成立する。かたやヒエログリフという文字をもったエジプトでは、支持体はパピルスである。paper の語源ともなっているが、厳密には紙とは言えない。またビブロスの港と通じて流通しており、ビブロスとパピルスの語は繋がっているという。パピルスに書かれたものが書物、つまりビブリアであり、ビブリアのなかの最高存在がいずれバ

イブルになる。もとい、パピルスはナイルの川辺に茂る植物の茎の繊維を用いたシートであり、嵩もあって折れやすいため冊子には向かない。卷子物としての利用が一般的である。のちに冊子本が世界の書物の主流となっても、複数に分冊される書物は「第一巻」なるヴォリュームで表わされるが、書物の原型は巻いていたのだ。古代エジプトが使用していた文字には、王のための特権的な聖刻文字ヒエログリフと、いわば筆記体である神官文字ヒエラティック、そして簡体の民衆文字デモティックなどがあるが、長い歳月をかけて絵からゆつくりと進化した楔形文字と違い、エジプト文字は“トト神の発明”によって一気に成立しているのが不思議だ。

古代エジプトでは紀元前三世紀に“図書館”が創設されている。アレクサンドリア図書館には70万巻のパピルスが所蔵され、実用文書の保管の域を超越した、文字通りヴォリューム豊かな学術文化センターとしてすでに機能していた。カリマコス（BC310?～240）はそこですでに司書的な役割を果たし、図書を整理分類して並べ替えて目録を作成している。

パピルスは数千年に渡って使われエジプト以外にも広まった。パピルスのシートによる卷子物はサイズも大きく、スクロールしてひもとくには手間もかかる。たとえば6メートルほどの平均的な巻物の場合、現在のようにあるページに付箋をつけてその箇所だけ参照するというわけにはいかない。一部を見るためには必然的に全てを広げねばならなかったのである。極めて確かな読書体験であったと想像される。そして、ひとつひとつ中身を確認する労力を省くための工夫としてティトゥリなる小さなカードが巻物の縁につけられた。ティトゥリに書かれている文言は著者名と、やはりインキピット方式でテキストの最初の語だったという。このティトゥリはもちろんのちにタイトルと呼ばれることになる。後にローマ時代の哲学者セネカは「人は読みもしない本を本棚一杯に詰め込んで、装飾された巻物の端とティトゥリだけ見て喜んでいる」と嘆くが、それは高度に情報化したメディア社会の現代への警告とも重なるかのようだ。貴重なパピルスの卷子本は個別の円筒ケースや専用箱に収納されて保管された。この箱はカプサと呼ばれるが、もちろん現在のカプセルである。

メソポタミア文明とエジプト文明が古代から栄えた、いわゆる「肥沃な三日月地帯」はただ水源に恵まれて潤沢で平和であったが故に文明が起こったのではなく、実際は河の氾濫などに対処すべく人間が切実に知恵を出さねば生き延びられない地であったからこそ、という説を聞いた事がある。切羽詰まった切実さが道を切り開くという教訓は、次に述べるパピルスから羊皮紙という支持体の進化からも見てとれる。

#### 4. ペルガモンの皮

ヘレニズム時代の都市、ペルガモン（現トルコ）は困っていた。ペルガモン王国（BC241～133）にもアレクサンドリア図書館に匹敵するようなものを、と画策したが、気候的にもペルガモンはパピルスをエジプトから輸入するしかない。しかし図書館をめぐってエジプトのプトレマイオス王を激怒させ、パピルスの輸出を停止されてしまう。支持体の不足という窮状が、羊皮紙の発明を生むのである。貧乏腕を磨くと言おうか、必要は発明の母と言おうか、とにかく、「欠」けている部分を心底認識して凝固させてやれば「次」が見えてくるのは世の常。ペルガモンは当然、支持体を自国にふんだんにある資源から調達しようとする。家畜の皮を利用した書写のはじまりである。羊皮紙（厳密にはこれも紙ではなく紙状の羊皮）は英語でパーチメントと呼ばれるが、語源はペルガモンの皮である。（英語のヴェラムは子

牛の皮であり、パーチメントより高級品。) 羊皮紙はパピルスの代用品に留まらず、パピルスよりはるかに優れた支持体だった。パピルスと違って丈夫で滑らかな羊皮紙の質感は裏表の使用を可能にしたばかりでなく、冊子本(コデックス)の形態に向いていた。キリストが巻物を手にしている宗教画が多く残っているが、キリストの時代の一般的な書の形態は巻物であり、冊子本が普及したのは2世紀くらいからである。

ほとんどの場合、羊皮紙には肉部分を食されて獣毛も利用されたあとの家畜の皮が有効活用されていた。毛側と肉側の裏表面で肌理が違ふことや、削りだしの違いや、好まれる書物の形によって、または用途や文化や宗教のニーズによって、使用法自体にはかなりバリエーションがあったと思われる。たとえば、ヘブライ語のヘブライ文字はダゲッシュという文字中心に穿たれる点を有しているが、ダゲッシュの有無や位置で音価や発音や意味が変わるため、羊皮紙の毛穴側を使用すると、そこに書かれる神聖なる聖典に致命的な誤解が生じる可能性がある。確かにプリンと不倫ではえらい違いだろう。

いわゆる紙が普及して活版印刷によって書物が大量刊行される15世紀以降まで羊皮紙は重用される。現在ではもちろん廃れてはいるが、一部の超豪華本や儀礼文書や証書類にわずかに受容はある。ちなみに、ユダヤ教のトーラーは今にちでも巻物の形態を保っている。

羊皮紙は今も昔も貴重品である。羊一頭から取れる羊皮紙はA2サイズともA4サイズが5、6枚とも78×60cm程度とも言われるが、こんにち思い描く一冊の本を作るために一体どれだけの羊の命が必要だったのか考えると気が遠くなる。生命を屠って用意された貴重なスペースであるがゆえに、羊皮紙上の文書にはパランプセストが頻発する。パランプセスト(palimpsest)とは二重写本とも言われ、一度書かれたものを消して上書きした羊皮紙のことで、隠された元の文書が透けて判読されることがある。元の文字と混同されることを避けるために羊皮紙を裁断して90度回転させ、文字の向きを変えるなどの工夫も見られた。パランプセストにおいては宿命的に新しい文書が古い文書の上に上書きされるため、古文書の史実順序の検証などの際にはごまかせぬ証拠になる。

## 5. 彩色写本のルミネとアウラ

印刷術が誕生する以前の中世で、本と言えば彩色写本である。写字生と彩飾画家が修道院や僧院で写本に従事していた。この作業、一瞬優雅にも思えるが実際は体力と神経の両方を酷使する重労働であり、当時の写本の隅には、眼精疲労を訴える涙ぐましい一文や空っぽの財布の挿絵なども見られるそうだ。電気はもちろん眼鏡もまだない時代である。貴重な手本を手で写本していく作業場に、火災を起こす恐れのある火の使用はご法度だったろう。暖はとれず、室内は暗く、回廊の書見台か壁をくりぬいたカレルで、寒さに震えながら細かな作業を行っていた名もない写字生を支えたものは、信仰の強さだったろうか布教の使命感だったろうか、それとも諦観だったろうか。中世までの職人に名前はない。アルス(人間の手技)のすべてが神にむけてのものであった時代に、神につかえる者が固有名を誇示することなどなかった。芸術作品に作者名の署名がほどこされるのは、古代ギリシア以降は人間中心主義のルネサンスまで待たねばならぬのである。中世の写字生はその手に羽根ペンをもち、淡々と写本にいそしむのみだ。現在、筆記具として一般的なペンはラテン語で羽根を意味するpennaから来ている。筆記具といえば羽根だったからだ。イタリアのショートパスタにペンネがあるが、それはペン先に似ているからだ。実際には羽根部分は切られていたともいうが、

羽根ペンには鷺鳥などが使われ、写字生が右利きか左利きかで右翼か左翼かの羽根を使ったという。また、写本の頭文字の装飾や縁取りや挿絵部分をイルミネーションというが、光をあてる、照らすという意味のラテン語からきている。クリスマス時期にルミナリエやミレナリオといった電飾が見られるが語感は同じだろう。光はもちろん神の比喻であり、本のなかに神の光を差し込ませる作業が写本である。ついでに、本文内容をわかりやすくするための挿絵をイラストと呼ぶが、これも語源は同じで光を挿入して明るくすることに由来する。写本の小さな細密挿絵をミニアチュールというが、このミニは挿絵に使われた朱色の顔料である鉛丹（ミニウム）が語源であり、長い歳月のなかで小さいサイズのイラストレーションをさす言葉に意味がねじれていったものだ。

彩色写本はもちろん一冊一冊が完全に手作業でオンリーワンである。同じ本は世界に一冊しかない。貴重な羊皮紙をふんだんに使い、労力を惜しみなく注いでまでも、創りあげるに値する書物。無限に近い数の羊を殺して採取した羊皮紙に値する書物。それは当時、聖書とそれに類するもの以外にありえなかった。殺された羊はまぎれもなくスケープゴートといえよう。神の輝きを伝えるべく金や宝石できらびやかに装丁し、細やかな細工を施された教会用の豪華本は、それ自体で呪物的な価値をもつ。当時の識字率からいって聖書の中身が読める者は限られていただろうが、もはや一冊の書物の存在自体に大きな意味とアウラがあったのである。書物はかくしてフェティシズムと結合する。フェティシズムの極意とは「本」体よりもそれを模した別の何かを崇拜対象とすることにあるからである。神は目に見えぬし触れられないが、彩色写本の聖書は確かな質量をもってそこに在る。そのとき、人々は聖書に神を見るのである。ご神体にも等しいあまりに稀少にして聖なる書物は、盗難や不慮の事態を避けるために鎖に繋がれていた。そうした書物をチェーンドライブラリーという。一冊入魂の貴重本ゆえだが、しかし美しい本を丁寧につくる古きよき時代という美談には留まらない。聖書のアウラを守るために、罪のない夥しい数の書物が虐殺されたこともまた事実である。キリスト教は周知のように一神教である。それは排他主義と常に紙一重だ。キリスト教化という文化統一の影で、繰り返し行われた異教や他分野の学問の書の殺戮と破壊。戦争に焚書に焼き討ち。アレクサンドリア図書館もそうしたなかで崩壊した。特定の宗教やある時期の政治上のエコノミーで失われた人類の記憶と叡智の損失ははかりしれない。もちろんキリスト教徒が迫害されてきた歴史もまたある、しかしこれもまた隣人愛を解く人道的な宗教と何となく理解されがちなキリスト教の一面である。

## 6. 反覆の強度

それがパピルスであれ羊皮紙であれ、量産不能で高価なものを支持体とする限り、それはとても気軽に消費できるものではない。未来に遺すべきものを吟味したうえで清書に使われるツールである。ではデッサンや草稿や下書きには何を使っていたのか。ロウ板である。木製の枠に蜜蝋を流し込み平面に固めた表面を、鉄筆で削って書いていた。もちろん鉄だけでなく、動物の骨なども臨機応変に利用されてきただろう。イタリア語で鉛筆のことを *stilo* というがその語源が鉄筆の *stilus* というラテン語。先の尖ったスタイルスだが、反対側は平になったものが多い。現在で言う消しゴムつき鉛筆と原理は同じだ。尖った方で蠟に刻み、失敗した部分を反対側の平らなところで削り取って消す。ロウ板の枠の木底が見えてきたらまた削りカスのクズ蠟で満たせばいい。実に経済的であるが、何ぶん朽ちやすい素材ゆえ残

存しにくい。最初のコデックス（冊子本）はこのロウ板を綴じる事からはじまったという説もある。固い鉄筆をもって柔らかなロウに傷をつける。傷は標だ。そして傷跡はまた再生する。スタイルスをもって何度も消しては書き消しては書きを反復していくうちに、文体や表現様式や型はおのずから高まって固まってゆく。そう、スタイルスからスタイルが完成していくのである。

## 7. アジアの支持体

ところで、紙はいつから存在するのか。中央アジアでは実は古くから存在する。中国では紀元前の紙が発見されているが、最初は書写用ではなく包装用であったようだ。支持体として古く用いられたのは骨や甲羅や石にはじまり、木簡、竹簡や絹だが、嵩張ったり、保存に適さなかったり、稀少高価に過ぎたりして一長一短である。後漢時代の蔡倫が、樹皮や麻屑などを用いて紙で実用性のある紙を献上したのは 105 年のこと。日本では推古天皇の時代、610 年に伝わり、聖徳太子が製紙と改良につとめ、やがて和紙の製造へつながっていく。シルクロードを通り、サマルカンドやバグダット、ダマスカス、エジプトを経て紙がヨーロッパに伝わったのは実に 12 世紀のことであり、発明から千余年の時間を要したことになる。殺生を嫌うアジアの地域では皮を使わず、樹皮をもちいる国もあった。ちなみに、物質としての個別本がとる助数詞は「冊」だが（集合同一印刷物なら「部」か）、木板の柵を紐で編んだことから来ており、本来の本にふさわしい単位である。

## 8. グーテンベルクの魔法

ルネサンスとは、万能の神の時代の終息であるとともに万能の人の時代の幕開けである。学問の中心は修道院や教会から大学などの教育機関へと移ってゆく。宗教書だけでなく学術書、人文書、そして小説（novel）が登場する。小説とは神の目でなく、特定の間個人の設定した架空の人物の目を通して照射した世界観であり、まさに novella、nouveau、nuovo、new…、とにかく新しい視点の提案だったわけである。人間に小宇宙を見いだし、神の似姿まで見たのは知性と美貌を兼ね備えたルネサンスの哲学者、ピコ・デラ・ミランドラだが、人文主義の到来は書物史を大きく変貌させる。学問の伝播に沿って向上する識字率は、それまでの音読の習慣を黙読に変え、個の読書空間を開いた。

ヨハネス・グーテンベルク（1400～1468）の活版印刷術はルネサンス期の発明のなかでもっとも影響力のあるものだったといつてよい。ルネサンスの三大発明は火薬、羅針盤、活版印刷術である。そこに私は個人的に遠近法を足して四大発明とするが、いずれも人間が神の統制下から巣立って行くために手に入れたアイテムであることは共通している。火薬とはたとえば武力という人力で領地を押し拡げるツールになるであろうし、使い方によっては花火として人間の目を楽しませるツールにもなろう。羅針盤もまた、神の指す方向でなく人間が自らの進む方向を決め、その位置を確認するための器具である。遠近法はまさしく、神でなく人の目を世界の中心に据えたものの見方の具現化であり、活版印刷術は人間の言葉の拡散と人間による理論づけの時代の到来を意味する。ルネサンスが、そして紙の発明や識字率の上昇が満を持して活版印刷術のための土壌を用意した。宗教改革は「印刷術の長子」と言わ

れるが、活版印刷術が宗教改革をおしすすめたことは確かに事実である。それまでの手製本、手写本、いわゆるマニスクリプトであった書物が、以降大量刊行される複製メディアになっていく。その革命を黒魔術と揶揄する向きがあったとしても不思議ではない。

ただ、グーテンベルク本人は、複製メディアによって情報伝達を加速化して効率を上げるという近代合理主義を目論んではいなかったようだ。手写本の、神聖なまでの美的価値と希少性を十分に認識したうえで、そのマニスクリプトの美をもう少しだけ大衆が享受できるように、というきわめて真つ当な意志の産物だったのではないか。そもそもグーテンベルク以降いきなり書物が大量生産されて一般に普及したわけではない。グーテンベルク印刷術の初期では 35 部のヴェラム刷本のために数千頭の子牛が犠牲になったというデータも残っている。換言すれば、本をつくるためならそれだけの犠牲もいとわれなかったのだ。グーテンベルク聖書、42 行の行組ゆえに四十二行聖書と呼ばれる世界ではじめての印刷本聖書は、羊皮紙と紙の分あわせて 180 部ほど刷られ、そのうちの 48 部が現在残存している。いずれも手製写本に劣らないほどに美しく、手が込んでいるものだ。以降 15 世紀中に作られた初期印刷本はインキュナブラ（ラテン語で揺籃）と呼ばれ、現在天文学的な歴史的価値をもったお宝となっている。

15 世紀末からはインキピットにかわって現代のようなタイトルページが登場してくる。セネカが生きていれば嘆きはさらに深くなつたろう。また、グーテンベルク以降、マクルーハンが「グーテンベルクの銀河系」と呼んだ歪曲した環境にヨーロッパが支配された、という示唆も興味深い。アルファベットというたった 2.30 種の表音文字を印刷媒体に乗せることで、グーテンベルクが西欧を視覚という単一感覚を特権化した文化に育てた側面は否めない。

## 9. 壁のない図書館

グーテンベルクに遅れること半世紀、16 世紀に「壁のない図書館」の誕生をエラスムスが宣言する。「アルドゥスは世界の果て以外に壁のない図書館を建てる。」 “建築”したのはアルドゥス・マヌティウス（アルド・マヌーツイオ、1452?ー1515）。エラスムスの言うところの「壁のない図書館」とはアルドゥス出版社が出した廉価版の古典本の比喩表現である。ローマ近郊生まれの学者アルドゥスは 15 世紀末、当時出版物の中心地だったベネチアで印刷所を立ち上げる。古典ギリシア語、ラテン語に精通した学識あるアルドゥスは、アリストテレスやプラトンのギリシア語を正しくかつ美しい活字で印刷した。読者層の拡大と読書速度の加速を背景に、学者や大学人たちが集まって協力して新しいテキストを手がける本格的な学術出版と商業印刷のはじまりである。16 世紀の幕開けとともにアルドゥスは A6 版ほどの小型本を刊行しはじめた。これは今日の文庫本のしつらえに重なる。かつてチェーンドライブラリーとして鎖に守られていた豪華本が、今や手の中におさまる小型軽量の版型で複製されるのである。グーテンベルクの手がけた本がいずれも大型高級本でノンブルのないものだったのに対し、アルドゥスの書物はノンブルが振られ、極めて小さなサイズで手軽に持ち運びができるようになった。学生でも読めるように従来の 1/5 程度の低価格におさえ、分かりやすい版組でフォーマットを制定した完装本で名著のシリーズがどんどん出版される。その際に工夫された活字がイタリック体だ。中世以来のゴシック体ブラックレターのいかめしさを払拭して、新たに開発された明晰で合理的な近代的書体である。イタリック体特有の斜めになった書体は、限られた小さな紙面にできるだけ沢山の文字を入れ込むスペース

エコノミーにも合致している。なお、日本語のフォントのゴシック体はサンセリフ、つまり装飾なしの活字体であり、いわばオルタネーティブゴシックを略したときにゴシックという逆の意味合いになってしまったもので、本来のゴシック体は黒々とした装飾過多の髭文字系をいう。新書や文庫や雑誌に限らず、単行本自体がかなりコンパクトな現代の図書環境ではピンとこないかもしれないが、書物はルネサンスまで羊皮紙でできており、鎖に繋がれてはいなかったとしても気軽に膝の上で読めるようなものではない。板製本に金具の留め金の古い書物の場合は平面の机で開く事さえ背表紙や蝶番部分に負担がかかるため、専用の斜めになった書見台で「拝観」するしかなかったのである。物理的にも比喩的にも、アルドゥスの小型本までは、書物はきわめて重いものだった。

アルドゥスの出版工房は独自のロゴマークを持っていた。海と親密な都市ベネチアらしく、いかりに巻き付くイルカのエンブレム。それを ALDVS の文字が横切っている。アルドゥスが大事にしていた警句に *festina lente* というラテン語がある。「ゆっくり急げ」の謂いだ。船を係留する錨が *lente* (ゆっくり) を、海を駆け抜ける海豚が *festina* (はやく) をそれぞれ象徴しているということだろうか。急激な世間の動きに迅速に対応し実践する素早さと、悠々と構えてじっくりと見極める思慮深さ…、現在にも十分通ずる警句である。アルドゥスの棺は花でなく彼自身が世に送り出した文庫本で埋められたとか。

## 10. 近代書物のマニエラ

18 世紀までの書店はおおむね製本工房を兼ねており、出版と製本と流通は分業化されていなかった。18 世紀とはフランス革命の世紀であり、神に次いで絶対君主の権威が揺さぶられた時代である。近代化の啓蒙の波は書物の規制緩和へ繋がった。18 世紀末、特に学術書を中心として書物の供給は飛躍的に伸びる。辞書に百科全書に小説…、書物を読み解く行為は世界を読み解く行為であり、自らの力で世界を変革していく意志でもある。テレビやインターネットのない時代、書物はマスコミの主要メディアだった。イギリスでは 18 世紀初頭にすでに著作権（アン法）がいち早く確立。功利主義的な傾向のあるイギリスなどでは書物は読むためにあり、図書館で借りてくるものという割り切りもあったようだが、フランス的な審美傾向はルリユールの伝統を育む。すなわち、仮綴じの表紙がない状態で本を入手し、好みの装飾装丁を施すオリジナル製本である。

書物の背表紙の逆、開く側を前小口というが 18 世紀の個人装丁本にはこの前小口を利用した絵なども見られる。小口を斜めに滑らせて広げると絵が浮き出すという一種の隠し絵だ。小口に金箔やマールを貼れば、閉じた時にはまったく見えない。裏表紙からずらすときと表表紙からずらす場合でダブルのイメージも可能だ。その特質上、随分とエロティックなデザインもあったという。

## 11. 記憶の貯蔵庫としてのビブリオテーク（図書館）

さて、わが狭き地下室にひしめく書籍はもはや書棚に整然と格納できるはずもなく、床に平置きで堆積して天井まで積み上がり、書斎内部は携帯電話が圏外になるほどの要塞と化している。必要に応じてなんとか目当ての書物を引き抜く毎に少しずつ地殻変動が起こり、一



定の間隔で書籍雪崩が発生する。それでも見つければまだいい方で、絶対に書斎のどこかに存在するはずの本を発掘できずに、市民図書館や大学図書館で拝借して間に合わせるという情けない事態も多々起きる。本の山が崩れるたび、そして、所持しているにもかかわらず借り物のタグつきの本を参照するたび、きちんと本が整理陳列された書庫をうっすらと夢見るのである。

それは勤務先の大学の図書館や、普段行きつけの市民図書館の書庫のイメージではない。それらはあまりにも実用に徹した便宜上の存在であって、美的要素が去勢されてしまっている。現実的な制約をすべて無視して理想的な書庫を空想するとき、必ず脳裏に浮かぶのはオーストリア、ウィーンの旧宮廷図書館のプルンクザールである。「世界一美しい図書館」とガイドブックで謳われる図書館だ。何をもって「世界一美しい」と普遍的に断言できるのか私には分からないし、それには賛成も反対もできない。美の匙加減は文化や地域、そして個人レベルでも変動が激しく、その振り幅の大きさこそ美の力だ。とにかくここを訪れるたび、私はある種の安寧を感じる。外国語をさして解さない私にとって、この図書館の蔵書の内容は意味を持たないものかもしれない。しかし、ただ美しい本がそこに美しく配置されて納まっているだけで満たされるものがある。私にとってこの図書館は比類なき美であって力であることは確かだ。PRUNKSAAL とは「豪華な広間」くらいの意味である。もともとはカール 6 世（1685-1740）が宮廷図書館としてバロック様式で建てさせたもので、設計はフィッシャー・フォン・エアラッハ（1665-1723）、没後は息子が完成させた。グーテンベルクの四十二行聖書を所蔵している他、代々のハプスブルク家の蔵書や作曲家の楽譜をはじめ、貴重な書物が今も見られる。見逃してしまいそうなほど質素なエントランスから入り入館料を払って階段を登ると、内部は一転して豪華絢爛な空間。その落差の衝撃でまず目を奪われる。奥行き 77.7 メートル、幅 142 メートルのゆったりした広間は 20 万冊の古書で壁面を埋め尽くされ、高い書棚には梯子がかかっている。20 メートル近い高さの丸天井の窓から注ぐ光が中央のカール 6 世像を照らし出し、荘厳な雰囲気だがどこことなくハリー・ポッターの映画の世界が連想される空間。ホールは演奏会場としても現役で、かつてはモーツァルトもこの場で演奏していた。宮廷画家ダニエル・グランの天井フレスコ画は皇帝を神格化して描いた壮大なもので、だまし絵的なトリックもちりばめられており、見上げる者の溜め息を誘う。図書館を小宇宙になぞらえた小説家がかつて居たが、この場に立つたびにいつも目眩がしそうな感覚にとらわれる。骨董品でも美術品でもない我が家の蔵書群とは較べるべくもないが、歴史と学問と美術と建築の融合に敬虔な気持ちになる。

2013 年の現在、時代は電子書籍のほうへと大きく舵が切られている。人々の住居から、そして書店から、紙の本が消える日も遠くないのかもしれない。図書館はいずれ美術館のように、骨董品の展示保存場と化するのだろうか。

## 12. 電子メディアと活版印刷術

15 世紀のグーテンベルクの活版印刷術がもたらせた書籍革命はもはやクラシックな史実である。「黒魔術」と呼ばれた理由を宗教改革がらみの政治的利害にもとづく偏見程度にしか私はそもそも考えていなかった。マクルーハンが何と言おうが私にとってはもちろん、もっとも恩恵を受けたと確信できる素晴らしい発明だったからである。ドイツのマインツにあるグーテンベルク博物館を詣でたときのことをよく覚えている。博物館併設のレストランの

名前は codex（既出、中世までの冊子写本）。館内には活字や印刷機、印刷物、蔵書票、歴史的製本の数々、そして四十二行聖書の展示。どれも極めて興味深く、美しく、興奮し、グーテンベルクへの畏敬の念を新たにするものだった。私はもちろん電子ブック懐疑派であり、電子書籍やインターネット上の情報を全面的に歓迎して受け容れることはいまだできない。グーテンベルク以降の紙製本を深く愛しているからである。しかし最近ある本のなかに意外な告発文を見つけた。

私が今、電子書籍…というよりネット媒体上にの蔓延する文書に対して持っている怯えと混乱そのままの吐露を、15 世紀のイタリア人学者が残しているのである。グーテンベルクの活版印刷術のテクノロジーを目の当たりにした同世代のニコロ・ペロッティなる人の書簡だ。引いてみよう。《誰もが好きなものを印刷できるため、何が最良であるかを軽んじる傾向が目につきます。代わりに忘れ去られたほうが、いや、それどころか、消去されたほうが望ましいような内容を、もっぱら娯楽のために書いているのです。しかも、価値あることを書く場合でさえ、内容を歪めたり改悪したりしていますから、偽りの書を 1000 部も世の中にばらまくよりは、本などないほうがましではないでしょうか。》（『つながらない生活』P189）この文中の「印刷」を「発信」、「本」を「ネット」と置き換えると恐ろしいほど現在の状況に酷似しているではないか。当時の有識者の感じた危機感が、いま再び今度はインターネットという発明に際して起こっているのである。私のような古くさいアナログ人間が今日の電子メディアの進歩におののいているように、15 世紀当時の人々もまた活版印刷術を畏れていたことが伺える。歴史は繰り返すのかもしれない…。

### 13. 書物のエロス

ふと思う。最近いつ読書をしただろう、と。何らかの書物をめくらない日はほぼない。ただ、そのほとんどが講義や原稿のための“調査”であって、読書ではない。愛おしい文章や素晴らしい著者を堪能する著作物ではなく、ただの資料として書物を消費する味気ない日々が続いている。

読書体験とはそのようなものではない。ライブニッツの書名を思い出すまでもなく、それは「襞」である。本が内蔵する、ぴっちり閉じた無数の紙の襞。奥行きの暗がりがあるから奥ゆかしく色っぽい。（電子書籍には表面しかない。厚みも、肌理も、パランプセストの可能性も、ない。）わざわざ袋綴じ製本の本を開かずとも、その官能性は十分だ。その封を分けて開き、乱暴に指先をおしこんで、視線を挿入する行為のめくるめき。欲望を突き立て、内容という果実を啜り、自己の思念との間で対話して摩擦を起こす。知に餓え乾く気持ちを濡らして潤わせ、むさぼる快感と悦楽。18 世紀までの金具付きで製本された書物などをひもとく心地はさながら貞操帯を解くかのようだ。多くの人に読まれて摩耗している図書館の本を手だれた娼婦の面影を見ることもある。

私の、いささかフェティシズムめいた本への感情はさておくにせよ、いずれにしても、本との邂逅は他者とまじわり、取り込み関係する行為であることに変わりはない。もちろんあたりはずれもあるし、相性もある。今の自分にはまだ太刀打ちできないような書物も、他愛無く緩いものも、時には痛みさえ感じる相手も。私にとって読書とは、究極的には世界とコイタスする感覚に他ならない。その挙げ句に自身の人生が豊かになり、多くの知をこの身に孕むことができれば最高である。

## 主要参考文献

- 『図説本と人の歴史事典』 高宮 利行 ・ 原田 範行 柏書房  
 『本の美術誌—聖書からマルチメディアまで』 中川 素子 工作舎  
 『本棚の歴史』 ヘンリー ペトロスキー 池田 栄一訳 白水社  
 『本の歴史』 ブリュノ・ブラセル 荒俣宏 木村恵一 創元社  
 『図説 本の歴史』 樺山 紘一 編 河出書房新社  
 『本のれきし 5000 年』 辻村 益朗 福音館書店  
 『書物の迷宮』 西澤榮美子 水声社  
 『読書について』 浅沼圭司 水声社  
 『図書館—愛書家の楽園』 アルベルト・マングエル 野中邦子訳 白水社  
 『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』 マーシャル マクルーハン 森 常治訳 みすず書房  
 『つながらない生活』 ウィリアム・パワーズ 有賀裕子訳 プレジデント社  
 西洋製本図鑑 ジュゼップ カンプラス 市川 恵里訳 岡本 幸治 白水社  
 Das Mittelalter auf der Nase / Chiara Frugoni , Verena Listl Beck C. H.  
 The Bible of Illuminated Letters: A Treasury of Decorative Calligraphy / Rosemary Buczek , Margaret Morgan  
 Barrons Educational Series Inc  
 羊皮紙工房 (<http://www.youhishi.com/>) のサイト中の文書



写真1 ウィーン国立図書館ブルンクザールの一画 (筆者撮影)



写真2 13～15世紀の板表紙製本と14世紀頃のコペルト装(柔らかな革で封筒のように本体をくるむ簡易製本)、表紙にマーブル紙を使った18世紀の革製本、18世紀イタリアのフィレンツェバインディングの手法を応用した豆製本。(すべて筆者製本)